

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
426-3845

10月



「上手いかなかったことから学ぶ」

今回は、川崎医療福祉大学 医療福祉部 子ども医療福祉学科 教授 副学科長の中川智之先生に話を伺いました。先生は岡山大学教育学部を卒業後、岡山大学大学院教育学研究科を修了されて現在に至ります。その後、倉敷市内小学校での五年間の勤務経験もち、小学生から大学生まで幅広い指導ができる先生です。日々、学生と向き合っている中で、今先生が思っていることや感じていることなどを聴かせていただきました。

私は現在、「妊娠・出産から小学校就学につながるあらゆる子どもと保護者の支援」を理念とする川崎医療福祉大学子ども医療福祉学科で、乳幼児の教育・保育と、保護者の支援をする人材の育成をしています。乳幼児教育・保育では、目標の達成、他者との協働、感情のコントロールに関する社会情動的スキル（非認知能力）が以前から重視されてきました。ノーベル経済学賞を受賞したヘックマン博士らの研究により、この非認知的な能力と、それを育む乳幼児期の教育・保育（ECEC）のもつ大きな可能性が、



世界的に注目を集めるようになりました。ECECは、子どもの貧困や教育上の不利益への対策として、一人一人の、より公平な育ちを実現することともに、社会的に大きな恩恵をもたらし、乳幼児期の子どもたちを保育し、小学校就学へとつなげる保育者・子どもへの支援者を育てることが、現在の仕事の内容です。

それ以前は、倉敷市内の小学校で、元氣あふれる子どもたちや魅力的な先輩方に囲まれて教諭として働いていました。小学校で過ごした五年間は大変なこともありましたが、子どもたちは可愛らしく、様々なことを学ばせてもらいました。教育現場での経験があっ

たこともあり、現在、所属する子ども医療福祉学科では、保育所・幼稚園等での実習を主に担当しています。

実際に子どもと生活を共にし、保育所や幼稚園の先生方から指導を受けることができる実習は、学生にとって大変貴重な学びの機会となります。慣れない環境での実習となるため、緊張や不安はつきものです。実習を成長の機会とするために、上手いかな経験をする大切さについても、学生たちに話をするようにしています。失敗を恐

れて、「できる」ことだけをしようとするのでは、失敗はしないかもしれないが、成長にはつながりません。上手いかわからないことにも挑戦しようとする姿勢が成長を促進します。上手いかなことを恐れるのではなく、先生方に助言やご指導をいただきながら挑戦し、多くの経験をjして実習から帰ってきてもいいと思います。

実習を終え大学に戻ってきた学生たちは、一回り大きく、頼もしく見えます。学生たちの成長を肌で感じること、教員として大きな喜びです。中には、力を発揮できないまま実習を終え、合格できず補充実習が必要となる学生

もいます。しかし、合格できなかった学生が、必ずしも力がない学生とは限りません。補充実習での頑張りや経験をj通して成長し、その後、難関である地元市町村の公務員保育職として合格する等、夢をかなえる力をもった学生もたくさんいます。

実習で合格できなかったことは、学生にとって大変辛いことではあります。が、自身を見つめ直し、考えや行動をより良いものになろうと真剣に取り組むチャンスでもあります。補充実習をするにあたり、学生たちと一緒に、なぜ合格とjなかったのかを一緒に考えます。実習日誌を見たり、その時の状況を思い出したりしながら、自分の行動が周囲からはどのように見えていたのか、どのような行動をすればよかったのか、学生たちと一緒に考えていきます。多くの場合、学生たちの考えや思いに問題があるわけではなく、緊張や自信のなさもあって、その考えや思いを行動として表すことができなかったことが反省点として出てきます。





「体育館シューズ」鉛筆スケッチ

倉敷市立児島中学校2年 清藤 鈴音（令和2年度）
中学校に入ってからずっと使ってきたシューズなので、少し形が変わっていたり、ボロボロになっているところをよく描きました。

前向きに取り組む、頑張るべきポイントが見えてきた学生たちは、実習で力を発揮することができるようになりました。補充実習後、指導して下さった園の先生方から、「なぜ前の実習で合格をもらえなかったのか分からない。」という評価をいただくことも少なくありません。勇気をもって行動した経験が成長を後押しし、周りからの評価や自分の自信にもつながっていきます。

組み挑戦できる環境を大切にしようと思っ掛けてきました。上手いかなくても、笑われたり責められたりしないという安心感が、頑張る取り組みのために必要だと考え、そのようなクラスとなるよう様々な場面で話をしました。



教えていただいた言葉に「ピンチはチャンス」という言葉があります。思うようにいかないときには、いつもこの言葉が頭に浮かんできます。上手いかないときやどうしてよいのか悩むときには、その大先輩や当時の職場のこと、様々な失敗をしながら成長してきたことを思い出しながら、新たな環境でも頑張ってきました。

それまでよりも一回り大きく成長するためには、それ相応の苦労が伴います。それまでとは同じ姿でいられることが少ないのではないのでしょうか。「成長」とは、何かが変化することです。「ピンチ」は辛いものですが、それまでの自分を容れさせ、大きく成長する「チャンス」にもなり得る、大先輩から贈られた言葉はそういう意味をもっているのではないかと思います。

てみたりする等、様々な経験が必要となります。その時々状況や状態に応じた適切な助言や支援があれば、子どもたちのよりよい成長につながる経験が得られると思います。

時には上手いかな経験も大切になります。子どもたちの成長のためには失敗も必要。そう思って子どもたちの失敗が許される環境を大切にしたいと考えています。そして、子どもたちが挑戦できたときには上手いいてもいなくても、挑戦したこと自体をしっかりと認めていきたいと思っています。子どもたちが様々な挑戦を繰り返し、その将来について一つ一つの理由を考え、次の行動につなげていこうとすることが、成長の糧となります。

子どもたちには、失敗を恐れず様々な挑戦をし、上手いいてもいなくても、その経験が成長につながるよう前向きに取り組んでほしいと願っています。（おわり）



外にも、「事前にこういう準備をしておけばよかった。」「あの時子どもに声をかけておけばよかった。」等、上手いかなかったことから、考えさせられたり気付かされたりすることが様々なありました。お世話になっていた大先輩から

「できなかったこと」が「できる」ようになるためには、何が大切でしょうか。本人の努力だけで、いきなり一人でできるようになるわけではありません。それまでできなかったことが一人でできるようになるためには、言葉で教えてもらったり、お手本を見せてもらったり、友だちや大人と一緒にやっ